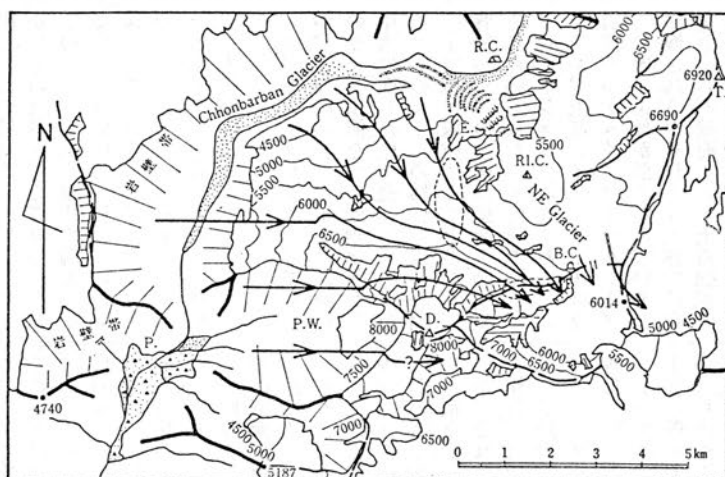




ダウラギリI峰における冬の風の流れ

ヒマラヤの冬の風は上空を吹き抜けるジェット気流に原因している。私達のヒマラヤ冬期登山の研究グループの一員、池上の説によれば、この高度二〇〇〇メートルで対流圏と成層圏の境界を吹く風の流は毎秒六〇メートル以上に及ぶ。熱帯と温帯の間を吹く亜熱帯ジェット気流、温帯と寒帯の間を吹く寒帯前線ジェット気流の二本のジェット気流のうち前者が北緯30°付近にあつてヒマラヤの上空を流れている。その流れの主軸(Main axis)は季節的に変化し、夏にはチベットの北縁を流れているが、冬になればすみやかにヒマラヤの南縁へと移ってくる。

ダウラギリ冬期登山ではファクシミリを使用して気象予知を行なったので、このような変化をつぶさに知ることができた。

十一月中旬頃の九四〇〇メートル(三〇mb)での気圧傾度は比較的緩やかで、ジェット気流の主軸周辺の強風域の風速も最大で五〇メートル/秒程である。また主軸の位置も日々変化しチベットとヒマラヤの間を行き来している。しかし十一月末からそれは急激に変化し特徴ある形をとるようになる。気圧傾度は北緯30°付近で急になり、十一月中旬には波状に流れていたジェット気流は直線的に流れるようになる。周辺の風速も速い所では六〇メートル/秒を越え、位置もヒマラヤの上空に定まったままほとんど動かなくなる。この風が登攀路のすぐ上空を吹き抜け、周囲にある全てのものを吹き上げ、削ぎ取っていく。ダウラギリの登山の際に気象担当の名越は、この山の吹き抜ける風について検討し、いくつかの興味ある知見を得ている。

その一つは山の形から生み出される風走廊である。すなわち強風が上空を吹き抜ける際に下部から吹き上げられた風と上部を吹き抜ける風が風下側の稜線に向かって合流し、風速の相加(?)作用を持たらすという点である。さらにもう一つは、ある高度に風の流れの分岐点があるという点である。これはプチャール側で観測された。プチャール壁(西壁)に当たった風は七〇〇メートル以上では上へと吹き抜け、それ以下では壁の前面へ下降して来る。これらの事実の興味深い点は、冬期登山をする場合には同じ山であってもその登攀ルート次第で風の受け方が異なり、七〇〇メートル以上とそれ以下ではまた風の流が異なっているということが示唆されるからである。下部の氷河谷の地形などで風が影響を受ける七〇〇メートル以下の風の流は専門の研究者に委ねるとして、登攀の最終段階で特に問題となる、七〇〇メートル以上を吹き抜ける風について、いくつかの八〇〇メートル峰をとり上げ推測を試みてみる。

なお、これから先の話は冬期ヒマラヤ登山にわずかな経験を持つ一登山者としての話であるので、冬期登山の参考程度にとどめていただければと思う。

山塊を角錐の複合体と考えて七〇〇メートル以上の部分を取り

1985年(昭和60年)
12月号(No. 486)社団法人 日本山岳会
The Japanese Alpine Club
定価一部 150 円

目次

- ヒマラヤの冬の風
越前谷 幸平……………(1)
- 海外の山……………(2)
- 「延べ201人のエベレスト登頂者」
「豪州の登山近況(下)」
武州雲取小屋のできた頃(下)
柿原謙……………(5)
- 図書委員会からのお知らせ……………(5)
- 東西南北……………(5)
- 「長谷村の仙人と二児山」「武田久吉先生追慕之碑」
図書紹介……………(6)
- 「EVEPECT '82」「エーデルワイス」
報告「紅葉会」「高尾山の自然と園央道の計画について」「自然保護全国集会」「上高地山研便り」……………(7)
- 丹水会夜話「丹沢回顧(下)」……………(8)
- 山の気象と気象講座(9)……………(9)
- 山日記編集委員会からのお知らせ……………(10)
- 会務報告・ルーム日誌・会員移動……………(10)~(11)
- お知らせ「講演会」(科学委員会)……………(11)

▶日本山岳会事務取扱時間

月、火、木、土曜 10時~20時
水、金曜 13時~20時
日曜・祭日は休み

▶図書室開室時間

日曜・祭日・月曜を除く毎日
13時~20時

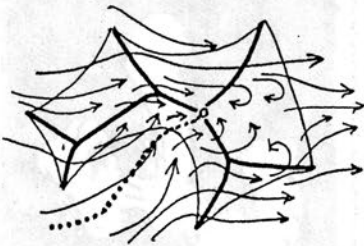
※正月休み 12/30~1/4

お知らせ電話

234 六六五九

出して風の流れの方向、速度などからその登攀を考えてみる。なおこの方法は太蔵喜福氏の論文の中で用いられている方法（「エベレストの冬の研究」『岩と雪』所載）であることをあらかじめおことわりしておく。考察するルートはいずれも初登の際のルート。

まずカンチエンジュンガであるが、この山の初登ルートは南西面のヤルン氷河をつめ懸垂氷河から南西に面した壁を登るものである。このルートの場合、広い谷間の中で風は収斂することはなく、背後からの風と南西壁を下降するそれ程強くはない下降風の中で、グレートシェルフに達することになるが、上部アイスフォールは崩壊度合が大きく、ノーマルシーズンに比し条件が悪くなっていると想像される。それより上部では左後方からの壁面を這い上る強風の中での登攀となり、グレートシェ



Kangchenjunga

ルフ上部の雪洞から頂上を往復することが登頂の鍵と思われる。

次いでマカルーでは初登ルートはバルン氷河から支流のチャゴ氷河をつめて鞍部に達し、北面へ廻って東稜の最上部から登頂したものである。このルートでは鞍部までは吹き上げる風と共に登り、鞍部の東面に頂上攻撃用の中型雪洞を設けることがポイントの一つとなる。東面に廻り込めば稜線を吹き抜ける横風にさらされるが、少なくとも稜線上を歩くよりは風は弱い筈である。鞍部東面の雪洞から頂上を一日で往復出来ればよいが、それより上部にシェルトアイを作れる可能性が低い。このリスクが最大の問題となる。

アンナプルナの初登ルートは冬期は危険に満ちたものになる。アンナプルナ氷河上部の鎌氷河と上部の懸垂部分は十一月上旬から十二月初めにかけ連日のように雪崩を引き起こす可能性がある。このルートは冬期登山には適してはいない。選ぶとすれば、七七年オランダ隊のダッチ・リブのところだ。ただ七〇〇メートルより上部の雪面に出れば吹き飛ばされない限り、這ってでも前進・退却は可能となる。七〇〇メートルより上部で雪洞掘削が可能な上限の地点（おそらく七四〇〇～七五〇〇メートルであろうか）に雪洞を掘り頂上往復を試みることは気象予知さえしっかりしていればそれ程

海外の山

延べ二百一人のエベレスト登頂者

エベレスト（八八四八メートル）のてっぺんに、とうとう二百人が立った。

十月三十日、映画「植村直己物語」撮影隊登山班としてエベレストにはいつていた八木原團明隊長以下七人の日本人が、登頂に成功したのだ。数え間違えがなければ、一九五三年五月二十九日、ヒラリーとテンジンが登って以来、この山に登った人間は延べ二百一人となる。シェルのスンダレーの四回登頂、故加藤保男の三回登頂など複数登頂者もいるので実数はこれより少ない。女性がこのうち五人いる。エベレスト・サミッターが百人に達したのは、一九七九年秋の西ドイツ隊で、この時女性第四登をなしとげたシュマツツ夫人は下山中に疲労凍死している。初登以来二十六年かけて百人が登ったわけだが、次の百人はわずか六年の間に、次々に頂上に立ってしまった。

最初に東南稜ルートから登ったのは、前述のヒラリーとテンジンを立たせた英国隊で、北面からの再三の攻撃と、ネパール側に転じたあとスイス隊とのし烈な一番乗り争いの末の初登頂だ。

一九二一年以来、英国隊の挑戦を七回も退けた北東稜ルートは、六〇年、中国隊の王富洲ら三人によって登られた。「切り立った第二ステップが難しかった。靴をぬぎ、肩車して乗っ越した」と、王は語っている。

六三年には米国籍がウェスタン・クウムを起点に西稜から東南稜に抜けて下山することに成功した。西稜隊アタッカーの、ホーンバインとアンソールは上部で北壁側をトラバース、雪のついたクロワールを登って頂上に出た。そののちホーンバイン・クロワールと呼ばれるようになったこのルートを、八〇年の日本山岳会隊が北壁を初登攀した際もたどることになる。

南西壁への挑戦は七〇年の日本山岳会隊、七一年春と七二年春の国際隊、七二年秋の英国隊、七三年秋の日本第二次RCC隊によって続けられたが、いずれも失敗した。七五年秋、三年前に敗退したポニントン隊長以下の英国隊が上部岩壁左手のガリーにルートを開き、初めて南西壁からの登頂に成功した。

ロー・ラから頂上をつなぐ西稜の全ルート登攀は七九年春、ユーゴスラビア隊がやった。

八二年春にはソ連隊が初めてエベレストに挑戦し、南西壁左手の岩壁に新ルートを開拓し、十七人のメンバー中十一人が頂上に立った。八三年秋には米国人が中国側から東壁ルートからの登頂を果たしている。

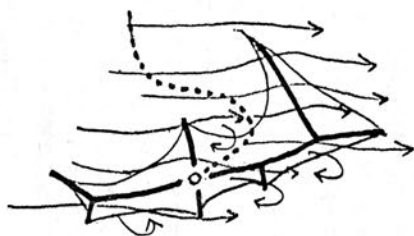
二百一人のうち、日本人登頂者は、七〇年日本山岳会隊の植村直己、松浦輝夫（隊としては第六登、登頂者としては二十五、二十六人目にあたる）以来、計九隊二十八人を数える。

登山史の上で新しい要素を持った登頂としてはこのうち、七三年第二次RCC隊石黒久と加藤保男の秋期初登頂、七五年女子隊田部井淳子の女性初登頂、八〇年日本山岳会隊重広恒夫、尾崎隆の北壁からの初登頂があげられる。

がんばったが、頂上まで行きつかなかった隊も無論ある。

八〇／八一年冬の植村直己隊、八一年、西稜をねらった明大隊、八三／八四年冬の今井通子率いるかもしか同人北壁隊（この冬も挑戦、断念）八五年秋の長谷川恒男率いる北壁隊などである。登ったまま帰らなかった者に、八二年冬の加藤保男、八三年秋の吉野寛、禿博信がいる。加藤は冬のエベレストを、吉野ら二人は無酸素登頂をめざして目的は達成したものの、生還できなかった。

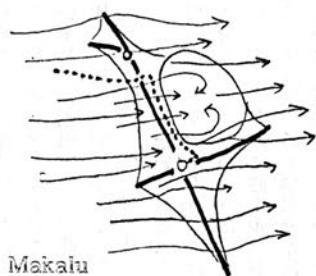
日本人の無酸素登頂は、今回登った撮影隊チームのメンバーで、八三年十二月に次いで二度目の



Annapurna

困難ではないだろう。この最後の部分の登攀は凹凸の少ない雪面上の風走廊の中の登行になる。因みにダウラギリについて同様の考え方で北東稜の登攀をみてみると、北東稜上へ北面で加速された風が集中するためこの稜線上にキャンプを設けることは雪洞にしても困難が予想される。七〇〇メートル以上では右側から絶えず吹き抜ける風の中を登り、頂稜では風に向かっている登攀となる。七〇〇メートルラインより上部の雪洞掘削可能な最上部の地点は年により異なると考えられるが、その地点より一日で頂上を往復し、可能な限りその日のうちに下部のキャンプへと戻ることが登頂後の行動の安全度を高めることになると言える。

チョーオユーは、初登が秋季登頂された珍しい山である。ティヒ



Makalu

らのルートはキャゴラク氷河から雪で覆われた西北西稜を登り頂上近くの比較的緩やかな斜面を経て登頂したもの。一方南面では本年二月にポーランド隊が南稜を登り冬季の初登頂を行なっている。この山の特徴は南面が丁度アンナプルナを思わせるような、衝立状の裾がかりを持つことと、北面上部の緩やかさである。西北西稜は更に北面には高い山が存在せず、地形に影響されないジェットストリームの辺縁風と上部で遭遇することになる。チベット領のこのような雪面が冬にどのような変化をするのか、私達はエベレスト以外には情報を持ち合わせていない。七〇〇メートルを越えれば極く限られた地形の中でしか雪洞掘削の可能性のある地点は見出せないかもしれない。そのような地点を登攀路中に見出し確保することが冬期登頂のポイントになるように思われる。七〇〇メートル付近に一ヶ所、さらに七五〇メ

登頂を果たした山田昇を加え、六人となった。前記吉野、禿のほか、この二人と同じ日に登ったイエティ同人数の遠藤晴行、山学同志会隊の川村晴一、鈴木昇己が、日本人「無酸素クラブ」のメンバーである。

十月三十日に登った七人のうち、山田は酸素を使った他のメンバーに全くひけをとらないスピードぶりだったという。九千メートル近い高所での無酸素登攀はこれまでも、これからは、ただただその人間の力による。

撮影隊のメンバーである四十七歳のカメラマン阿久津悦夫も二百人目の一人としてエベレストに登り、日本人としては初めての四十歳代登頂者となったが、同行者が支払った代償は大きかった。疲労の極に達し、サウス・コルまで戻れなかった阿久津に付き添う形で本木哲が八千五百メートル

豪州の登山近況 (下)

豪州における登山区域

俗に「ビドー」といわれる、ブルー・マウンテン地区から登山が始まり、七つの主な地区が生れ、その一つが数百のルートをもっている。その中でもA図(前号会報に掲載)の9及び11は一九七〇年に開かれ、トップ・クライマーのユーバンクとアレックによって最もむずかしいテスト・ルートがそこに作られた。

一九七〇年には世界一美しい岩場のアラパイル山(A図の11)をロックウッド氏が発見した。すべての困難なルートが二五〇〇もあり、あるものは二〇〇メートルの高さである。豪州のうちでここに殆んどすべての困難なルートが集中しているように見えるし、また年間を通して自由に登攀できる格好の場所でもある。

冬になればクイーンズランド

山をきれいにゴミは持ち帰ろう

の高所で共にビバーク、あぐく両足指切断を言い渡される凍傷を負ったのである。

「地球は青かった」のせりふで有名になったソ連のユーリー・ガガーリンが人類初の宇宙飛行士となったのはエベレストの初登頂から八年後の一九六一年である。以後、アメリカなど各国から宇宙へ飛び出した人間は八十五年十一月一日現在で、百九十三人になる。これは実数だから延べにすれば二百数十人、エベレスト登頂者と現時点ではほぼ並んでいる。

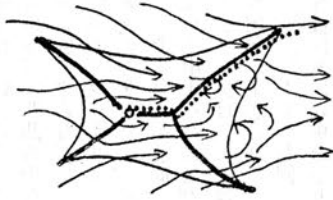
違うのは、宇宙人クラブには目下一人もはいっていない日本人が、エベレストについては少なくとも数の上ではトップクラスという点である。私たちは、エベレスト大好き民族になっているようだ。

(江本嘉伸)

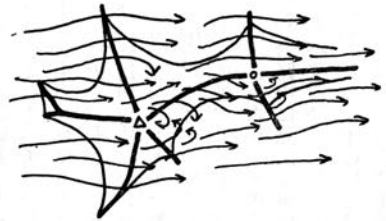
は特に人気がある。中でもフログ・バットレス、グラスハウス山とノーマン山など南の山にみんなどは出かける。北の山では問題は登攀だけではない。蛇や二メートルもある「とかげ」などがテント内にも忍びこむ。南及び西部豪州も、また良き登攀地区であるが、「タシー」との愛称でよばれるタスマニアはせまい地域であるが、花こう岩、粗粒玄武岩などが未登攀の場所として残り、その中には四〇〇メートルの高さのものもある。天候不順であるため夏でも吹雪に逢うこともあるので、食糧と装備は完全でなければならない。ここにはたった一度の登攀でも一週間分くらい楽しみを味わえる冒険がある。他の連中が発見する前に最も面白いルートを見つけようという競争心と、それになるべく秘密にしようという気持が豪

ートル付近に最上部のシェルターを作ることが出来れば背後から吹く風を受けながら頂上に到達することはそれほど大きな困難ではないだろう。この山は北西面から登れば私共の採った方法での登頂の可能性の高さ Minor eight thousand であると言える。

エベレスト・ローツェ山塊はいずれもウェスタン・クウムから夫のピークに初登頂が成されている。エベレストは既にこのルートから何度も冬期登頂が成されており、就中ポーランド隊の登頂はヒマラヤ冬期登山の先がけともいえるべきものであった。春秋期についても八〇〇〇メートル峰の中では異例の多数の登頂が成されているが、地表上で最も酸素分圧が低く、最もジェットストリームの主軸までの高度差が少ないという苛酷な物理的環境条件に変わりはない。冬期間七〇〇〇メートル以上でジェットストリームの影響をよ



Dhaulagiri



Cho Oyu

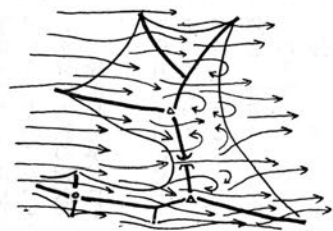
り強く受けるとすれば、この山はその登降において最大の影響をこうむることとなりタクティクスについても必然的に、他の山に比し困難であるものと考えてよい。チョーオユー以下の Minor eight thousand は近い将来に、よく準備され、それ程多くはない数のシェルパ達の支援を受けた少人数の隊が冬期登頂を成し遂げる可能性は高い。更にこの隊のうちから冬期の無酸素登頂を行なう者が出て来ることも想像に難くない。

しかしエベレストにあつてはこのいずれもが困難であり、他の山に比べて遅くまで課題として残されるように思う。無酸素冬期単独エベレスト登頂という目標は人類の冒険のターゲットのうちに含まれた当分入ってこないように思う。もしこの山で冬期に他のルートに登るとすれば、最も困難度の高いのはやはり西稜だ。一切のスノー

海外の山

州の登攀技術を今日の優秀なものにしたようである。豪州人の登攀成果

ジョン・ファンテニが主なルートの初登攀者である。六〇年代及び七〇年初期に彼はヨーロッパ、米国、ニュージーランドの主峰に登り豪州人の先達となり、そのあとに多くの後輩が続き、マッターホルン、ドリュエ北峰、モンブラン及びニュージーランド南アルプスに数多く登り始めた。七〇年からヒマラヤ遠征が始まり、八一年にアマダブラム北稜やチャングヤバン南西稜のアルパイン・スタイル登山が成功、これに自信を得たのか四、五人の少人数でアンナプルナ第二峰南西稜に初登頂し、このグループは八四年十月にチベットのからのエベレスト無酸素登山にも成功する。



Everest and Lhotse

シェルターの掘削を受け付けない高度差一八〇〇メートルに及ぶ岩稜の強風下での登攀は、冬期ヒマラヤのバリエーションルートの最も困難な課題の一つとして来世紀へと持ち越されよう。北壁もまた風走廊になっており可成り困難であると考えられ、八

〇〇〇メートルラインを越えた83/84年のカモシカ同人数の登攀は賛辞に値する。これらに比べ乱流は予想されるものの、風下側にある東壁は優れたクライマーを擁する隊で六五〇〇メートルにまで達することが出来れば、八〇〇〇メートル付近まで雪洞掘削の可能性な地点があることも予想されるため、近い将来に冬期登頂が成功すると考えられる。

ローツェはエベレストの南東稜ルートと同じく七〇〇〇メートル以上ではウェスタン・クウム側から吹き上げる風の中で八〇〇〇メートルラインに近付くが、最後まで稜線上の行動とはならないため七五〇〇メートルより上部に一カ所、居住性を備えた低い極地型ピラミッドテントを氷壁上に固定す

一方ロック・クライマー達も仲々活発で、ヨセミテやエル・カピタン巨大な北壁に登攀し、その渓谷の小さいが、むずかしいルートにも成功している。豪州クライマーはアメリカのルートで自らの技を試したかったのである。これらのクライマーの中で、最も印象的な登攀は、キム・カリガンとグレッグ・チャイルドがエル・カピタンに再度挑戦し「太平洋壁」にアルパイン・スタイルで成功していることである。

キム・カリガンは豪州一の登山民間大使として最もよく知られ、山岳雑誌等にはしばしば出てくるが、同じような技術を持ち情熱を寄せている豪州人が多数いることも事実であり、今後の彼等の成長、発達が非常にたのしみである。

海外の山

れば登頂は他の八五〇〇メートルを越えた Major eight thousand に比べれば困難ではないと考えられる。

以上強風下での登攀を念頭におきいくつかの八〇〇〇メートル峰の冬期登山時の行動についての予想を行なった。このうち二座はすでに登頂されたピークであるが、年や時期により登攀の条件は異っており、如何にしてその時点での環境条件、とくに強風に対処しつつ登頂に導けるかが今後の登山における興味あるところだと思ふ。強風期を耐える持久力と弱風期の迅速な機動性、正確な気象予知力が各隊に求められることは言うまでもないと思う。

武州雲取小屋のできた頃(下)

柿原 謙一

富田さんが新設の武州雲取小屋管理人となって入山したのは、一九三〇年(昭和五)らしい。この青年を推したのは、三峰口駅前にできた奥秩父保勝会の菅原一さん

図書委員会からの

お知らせ

二月から三月にかけて図書委員会恒例の三つの会がひらかれます。ふるって御参加のほど、お待ちしております。

第十七回

山岳図書を語る夕

テーマ 山岳写真めぐって

講師 白旗史朗氏

日時 二月十五日(土曜)

午後三時より

場所 本会ルーム

国内はもとより世界各国の山を精力的に撮りつづけて、かずかずの作品集を刊行されている白旗氏をお招きしてお話をうかがいます。

第二十三回

この一本展

右の企画にあわせて、当日、本会図書室にて『高山深谷』その他、山岳写真の歴史的文献

である。菅原さんは秩父地方史の実地調査に専念された人で、小冊子ではあるが「秩父物語」の著作がある。なお三田村篤魚と親しく、秩父地方での平賀源内や榎教

献を展示いたします。逸品をお持ちの方はぜひ出品して下さいますよう、お願いいたします。

第十四回

山岳史懇談会

テーマ マナスル登頂(第三次

隊の成果を中心として)

講師 今西寿雄氏、大塚博美氏ほか

日時 三月十三日(木曜)

午後六時三十分より

場所 本会ルーム

マナスル登頂三十年を記念して隊員諸氏から遠征の経過とその意義をうかがいます

図書委員会

祖井上正鐵の史料探索を依頼されていた。この菅原さんから、私は学生時代に「下界には住めない好青年がいるので、雲取山に送ったよ」と聞かされていた。戦後富田さんと山で語りあったおりに、彼は「菅原一先生」の敬称を使っていた。

「カマ仙」という名のついた所以について、前記町田立穂さんは「人間は鎌一丁あれば、山で生活が出来る」という彼の哲学による、と書いている。私は富田さんから、「登山道を敵う笹の葉は、水雨や沫雪のときなどに登山者の体力を奪って死に至らしめるので、大鎌で刈っておくのだよ」と聞かれ、事実白岩方面や狼平方面の笹は、よく刈られており、さすが鎌仙と実感した覚えをもつ。

富田さんはほんとに町には住めない人だった。満州事変か日支事変初期の頃らしいが、塚本・町田・吉田のトリオで、東京に奥秩父のタベ(映写会)が開かれ、富田さんを壇上にあげて観衆に紹介した。その夜は吉田、富田は上野駅付近の旅館に泊る。ところが吉田さんは朝になって、鎌仙不在に気がついた。富田君も東京にできて浮気心がでたんだね、と友人と笑っていると、ヒョコリこ当人が戻ってきた。どこへ行ってんだとたずねるや、富田さんの返事、「ああこりたもんだ。宿の綿入布団に寝たが柔かくて熱くて

眠れない。そこで逃げだして、公園の木の下にあったベンチの上で寝たんだ」である。名実ともに仙人だ、と吉田卯吉さんは驚いた。このエピソードは、後になって吉田さんから私が聞いた実話である。

戦時下で隣組制度ができると、富田さんには大事な事態になった。武州雲取小屋は三峰神社の隣組に編入されたのである。

富田さんがつれづれに訪れるのは、三峰神社、三条ノ湯、七ツ石小屋、日原などであり、三条ノ湯での入浴は大きな慰安だったという。日原へ往復すべく富田新道を拓いた富田さんの気持は、判るような気がする。

なお一九三三年(昭和八)の「ハイキング」第二巻第三号には、小沢林成「雲取山に登るの記」があり、七ツ石小屋から雲取山頂まで、偶然行をとにした富田青年の風貌が、よく書かれている。昭和七年晩秋のことである。

富田さんは初代の武州雲取小屋管理人として、約三十年間もつとめ、入山後しばらくして年間を通じて山小屋で暮らした。遭難防止のため、登山者にかなりきびしい忠告をするので、反感をもつ人もあったようであるが、多くの利用者からは畏敬の念をもたれていたと思う。一九五五年(昭和三十)の十二月二十三日、雪ふりつもる武州雲取小屋の自室で病死された。満五十六歳であった。

仙人近いて秩父鉄道では、社員堀口昭吾さんを主任として、社員数名の交替勤務で山小屋を管理した。しかしこれは相当無理な勤務なので、富田さんからの話ですでに一九五五年(昭和三十)から入山し、富田さんの手伝いをしてきた新井信太郎さんが、やがて富田さんのあとを継ぐこととなり、現在に至っている。同氏は入山以来三十年を数える。武州雲取小屋創業六十年は、一九八八年七月だ。

附記 白岩小屋のこと
白岩小屋は雲取に着く時間のない人のために、一九三一年(昭和六)の初夏に現在地に建てられた。手続きなど武州雲取小屋と全く同じであり、工事も山中宗太郎さんが請負っている(秩父鉄道保存文書)。

初代の管理人は大血川の山中麻雄さんで、満州事変で戦死された。同氏の兄が信義さんで、しばらくそのあとを務められたという(前回黒沢八郎及び山中信義さんたちの話)。

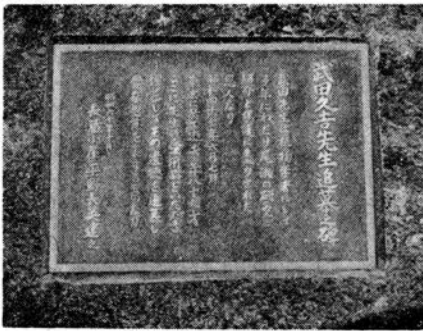
東西南北

長谷村の仙人

と二児山

信州長谷村の仙人こと交野武一

名誉会員の独居を訪れたのは、仙丈岳の山肌が紅葉に彩られた中秋の午後。聞きしにまさる仙人ぶりの生活に驚倒したのは、私のほか



に会員太田敬、佐々木誠、鈴木嶋夫の三君。万年床とスウェーデン製暖炉の置かれた書斎。そこで見出した蓼科山麓の雷親翁、両角万仁武とならんで写した古い印画は、数十年前の仙人の若きころを物語る一葉だったが、燃える薪のなつかしい臭をかき、炎を見つめながら、炉辺に坐して私は仙人の半生をふり返った。

翌十月二十二日は五人で二兎山へ向った。仙人はクマール(愛犬)を連れていった。途中から倒木のひどい、かすかなケモノ道しかない密林につこんだ。十数年前に会員牧野衛さんが登ったときと殆んど変っていない状態だった。遂に時間きれて、西峰(二二四三米の三角点のある東峰より三〇米ぐらい低い)の樹林につつまれた頂きまでで思いとどまり、踵をかせした。

しかし登りにつけたナタメを拾っての下降は、予想外に時間がかり、標高一七八〇米ぐらいで野シヤガミ。幸い風もなく、まると月と満天の星が森の梢に覗かれ、焚火の火は夜どおし絶えず、鹿の鳴き声も一度だけ。二十三日昼近く仙人の宅に戻って、ビールで渴いたのどをうるおし、前夜つくる筈の鳥鍋をかき。満腹した四人は仙人の好意を謝し、独居ゆえに特に仙人の健康を祈って、午後色の濃くなった浦を離れた。

二兎山の西尾根はかなり上まで伐採されているのを見とどけたので、大鹿村の儀内路から北川牧場を経て西峰にとりつくのは、北面から行くより手間がかからぬだろう。

(望月達夫)

武田久吉先生

追慕之碑

―尾瀬・ヤナギランの丘に建つ―

尾瀬の平野家の墓地に立てられた武田久吉博士の碑は、風雨に朽ちて、平野長英さんはじめ関係者の胸をいためていました。特別保護地区という制約もあって、手をつけることができませんでした。英さんの悲願がかなって、自然石の立派なものになりました。

碑面には「武田久吉先生追慕之碑／武田先生は植物学者にし



図書紹介

ABEPECT '82
(エヴェレスト'82)

―ソ連隊の世界最高峰登攀―

一九八二年春にエヴェレスト南西壁の新ルートから登頂した、ソ連初のネパール・ヒマラヤ遠征隊の記録。

本書は四部からなる。

第一部は文学新聞の記者ユーリ・ロストの執筆した登頂レポート。本文の冒頭ですでに事件が解決しているミステリーを書くような手法で、この職業ライターは、物語りを進めていく。

すなわち、登頂は終りすべては解決している。しかし、なぜ十一人が頂上に立ち、六人が立ってなかったか。著者は現場検証にネパールに飛ぶ。下山して来た隊員達とのルクラでの出会い。そして、登攀へと話はさかのぼっていく。その間に隊員選考の方法が記されている。低圧

タンクで一万呎の高度に耐えた者を優先的に選ぶなど、ソ連登山界の現状が浮き彫りされて興味をひかれる。登攀の記述では、頂上に至るまでのロジスティックなものを見事に切り捨てている。クライマーでない職業ライターであるが故の大英断であるが、広い読者を対象にするという当初の編集方針から、当然の結果とも言えよう。隊員同士、登攀グループ同士、そして隊員一人ひとりの動揺と確信の中へ、著者は深く切込んでいく。そこに、各隊員の個性豊かな姿が浮き彫りにされると同時に、登頂に成功した者と失敗に終わった者の背景が、次第に浮び上ってくる(八八ページ)。

第二部は写真(一六五ページ)

第三部は隊長・隊員間の交信。隊員の手記。各人の最も感動的な体験数日間に絞られ、簡潔明瞭。これらは第一部のロストの文章の裏付け資料という意味も持っている(八三ページ)。

第四部は隊員紹介、登高ダイアグラム、各グループの行動概要、エヴェレスト登山史など。これらは記録の羅列ではなく、読者の理解を助ける事典の役をしている。体育スポーツ出版社、モスクワ、一九八四年、一七〇×二五五mm、二四ページ

ABEPECT, IOLO-

3ATAJHAJI

CTEHA

(エヴェレスト

南西壁)

ソ連隊の世界最高峰登攀記録『エヴェレスト'82』に続いて、レニングラート出版社より本書が出版された。これはレニングラートの隊員V・パリベルジンとV・シヨロピンの手記、及び隊長E・タムの交信記録を中心に書かれたもの。

その他、同隊にはレニングラート科学映画社のV・ヴェンデロフスキーとD・カバレンコが同行し映画を撮影したが、その時の苦心談も書かれている。また、レニングラートの登山家の登山史、ヒマラヤ登山史も簡単に冒頭で述べられている。

本文二二二ページ、写真三八ページ、一九八四年出版

(田村俊介)

エーデルワイス

久合田 弘著

「このたびすすめられて、この本を出しました。私と妻との

て／多年にわたり尾瀬の研究と／紹介と保護に尽力された／恩人なり／昭和四十七年六月七日／東京に於て逝去／年八十九才／ここに先生の愛用品をいただき／埋葬してその遺徳を追慕し／愛敬の意を表するものなり／昭和六十年十月／長蔵小屋平野長英建之とあります。

平野長蔵・長靖さんらの墓のたわらに据えられた碑の石は、長蔵小屋に近い尾瀬沼の畔にあったもの。正面に、長英さんの筆跡を工芸家の真水悦子さんの手で鍛金した銅板がはめこまれています。

「これでやっと肩の荷がおりました」と、いまは病気がちの長英さんは涙ぐんでいました。

尾瀬へ行かれたら、ぜひ、ヤナギランの丘に立ち寄って、武田博士をしのんでください。

(峰谷 緑)

報告

紅葉会

大石 惇

今年で二十八回目を迎えた静岡支部の紅葉会は、梅ヶ島温泉で十一月九日、十日の両日、予定通りとり行なわれた。まずまずの天候に恵まれ、参加者三十三名は、赤と黄と緑の三色で彩られた山々を眺め、温泉に体を沈めて深山幽谷の靈氣を満喫した。

九日午後二時に静岡駅南口に集

合した会員は、旅館が出迎えたマイクパスで、安倍川を右に左に見ながら一路梅ヶ島へと北上する。

車中では山本支部長がガイド役を務め、安倍川の由来や地名などに名ガイドぶりを発揮する。安倍川は次第に細く、道は狭くなり急峻な山肌が迫ってくる。紅葉の色も一層鮮やかさを増してくる。静岡駅の出発も遅れ、コンヤ温泉近くでバスがパンクするハプニングがあったものの、旅館に電話して、出迎えを頼んで全員が梅ヶ島に着いた。予定より大幅に遅れて夕方五時近くであった。六時の食事まで入浴したり、写真を撮ったり、思い思いの行動をとる。

夕食は六時すぎに始まり、山本支部長の歓迎の辞ののち、今西会長から二十八回も永きにわたっての紅葉会を続けてきた静岡支部会員に対する労いの挨拶があり、続いて大塚副会長の乾杯の音頭で、山菜料理とサクラエビを肴に宴が続いた。簡単な自己紹介がすんで部屋のあるあちこちでは、再会を喜びあい、山の話しに話がはずむ。旅館の下河原では、キャンプファイアーの火が灯され、本職の永野さんの味つけによる「おでん」と「おしる粉」と缶ビールで、外に会場を移して夜のふけるまで歓談した。翌日の山行にそなえて、三々五々温泉に入り床についた。翌十日は、雲が低くたちこめ小

七年にわたりましたアルプス花の旅の中間報告のつもりでした。が、変なものになりました」と、或る日こんな添え書と共に、エーデルワイスがブルーの地色の中に、丸く写し出された表紙の『エーデルワイス』の本が届いた。

私がエーデルワイスの愛好家として、大阪教育大学名誉教授であり、阪大と大谷女子大の講師である久合田先生を知ったのは、本の文中にもある通り、当時山田圭一氏が留学中に私のクラブにエーデルワイスの資料を送って下さったりして文通していた関係で紹介され、関西の久合田先生、関東の坂倉がエーデルワイスを通じて、情報交換を始めたのが最初であった。その七年間の花の旅の足跡を素早く纏められたのがこの本

で、私は夢中で一気に読了してしまつた。特に文中の雪とエーデルワイスの一節と、昔、辻村伊助が花との出会いをしてから六十七年目に、再び同じ場所で、花を発見された時の描写は、まことに感動的で心打つものがあつた。

この本の内容は、第一部が文芸の中のエーデルワイス、第二部はエーデルワイスは現か幻かで、ヨーロッパ各地の花の探訪記、第三部はエーデルワイスの解説で、実に詳しく説明されていて、最後がエーデルワイスの写真集で、ウンターローホルンの雪の中の花や、辻村伊助の記録に残っていたと同じ場所で見つけたエーデルワイスなど、貴重な十枚の写真が収められている。

さて私も何時の頃からか、やはり久合田先生と同じく、辻村伊助の『スイス日記』や横有恒の『山

雨がポツリと頬にあたるあいにくの天気であつたが、山を見れば落着かなくなる人達ばかり、六時には起き、出発準備に忙しい。七時には、この地域の山や谷をほとんど登り尽している石間さんをリーダーとする山伏(二〇一三メートル)組六名を送り出し、続いて杉本さんをリーダーとする八絃嶺(一九一七メートル)組の六名を送り出した。今西会長と大塚副会長は往年の健脚ぶりを発揮しこの八絃嶺組に加われ、頂上に向か

つた。約一時間遅れで、山本支部長を案内役とする安倍峠組十五名が、文明の利器を利用して八絃嶺分岐点まで登り、安倍峠から安倍大滝経由で下山した。天気は回復に向かっていたが、いづれのコースも近くの山々が見えかくれる程度で、展望はきかなかった。しかし、それぞれのコースで紅葉に顔を染め、思い思いの登高を楽しみ、全員予定より早く旅館前に集結できた。おでんとおしる粉の残りを平らげ、温泉で汗を流して、

行」の中で、ヨーロッパ・アルプスのエーデルワイスを知り、この花と共に生きた半生の記録を『エーデルワイスの詩』として発刊、今年再版し、記録交換のため贈呈した。先日学会で上京の折、私宅ルームへ寄られて、新たな徳川時代のルーツを探究されたお話を聞いたが、貴重な文献の発見を共に喜んだ。欲を言えば本名は「アルプス花の旅」として、紀行文中にエーデルワイスの写真が挿入されたら、白い星がより一層輝いたのではないかと思つた。

一九八五年二月大阪書籍発刊、一二五ページ、一五〇〇円

(坂倉登喜子)

図書紹介

来年の再会を期し、安倍奥の山々に別れを告げた。

参加者(敬称略) 今西寿雄 大塚博美 川北 仁 石川 寛 早川良太郎 穴田雪江 山崎 健 里見清子 松本慎太郎 矢沢義弘 金沢喜八 錦織保清 川上光久 丸茂キクエ 岡部みち子 砂田定夫 松家 晋 西郷正郎 山本朋三郎 磯野兼二郎 石間信夫 柴田昌亮 安間 莊 大島康弘 坂井八郎 有元利通 永野敏夫 近藤浩之 望月福次 鶴見敏彦 杉

本宜明 長田義則 大石 惇

高尾山の自然と圏史
道の計画について

自然保護委員会

今、首都圏から放射状に広がる東北、関東、中央、東名の高速道路を全部横につなぐ「首都圏中央連絡道路」(圏央道)の計画が発表されている。

このうち中央道(八王子市裏高尾)から関越道(埼玉県鶴ヶ島町)を結ぶ約四〇キロの第一期工事がこの六十年秋にも決定しようとしている。

もしこの計画が実施されると、都民のオアシスとして親しまれ約千六百種の豊富な植物を有する高尾山の腹にトンネルが掘られることになり、それによる動・植物に与える変化が今、心配されている。

そこで自然保護委員会では九月八日、八王子自然友の会の吉山寛氏の案内で高尾山口から琵琶滝・自然研究路2号・蛇滝・浅川老人ホームのコースを、トンネルの通る場所の確認とその上に育つイヌブナ、の原生林をはじめとする種々の樹林の説明をうけながら視察山行を実施した。

特に老人ホーム付近の静かな山間には、中央道と圏央道をつなぐ巨大な裏高尾ジャンクションが作

△丹水会夜話・6月15日、ロッジ「峠」にて▽

丹沢回顧(下)

石川 治郎

尊仏小屋と丹沢のブナのことなど

尊仏小屋ですが、昭和の初めまで丹沢には小屋がなかった。わずかに丹沢山に陸地測量部が残した草小屋があったのと、あとはところどころに炭焼き小屋があったくらい。

昭和十年ごろ、丹沢で遭難が相ついで起こり、横浜山岳会(昭和五年創立)で「ひとつ丹沢に山小屋をつくらうじゃないか」ということになりました。秦野山岳会、相模野会にも呼びかけ、寄付集めとともに資材運搬の労力奉仕に励みました。大倉から塔ノ岳まで、何回となく資材をかきあげたものです。

そのようにして昭和十四年に完成したのが尊仏小屋で、十五坪、二階建のなかなかいい小屋でした。総経費は四千五百円。ところが戦争中、管理ができなかったために、終戦時には柱が二、三本残ったきり、再建不可能で小屋の権利を放棄せざるを得ませんでした。

いま、塔ノ岳には二つの小屋があります。古い方の小屋が、横浜山岳会が建てた尊仏小屋の跡で、基礎の石積みは昔のままです。あの石は、オバケ沢から会員が数珠つな

飲む時間も持つことができた。

この計画には地元の人達とお茶を問、反対する地元の人達とお茶を

ぎになって運びあげたものです。

昭和三十年に国体登山がここで開催されたのを契機にして、丹沢は大きく変わりました。このとき、神奈川県が登山道を整備し、山小屋をたくさん建てました。丹沢はよくなったといえるし、ひらけすぎてしまった気もします。当時、いちばん深い山だった蛭・松洞丸間も、いまでは家族づれのハイキングコースに変貌しました。

丹沢でブナの伐採がはじまったのは、終戦後しばらくたってのことです。大群山から加入道にかけての被害はひどいものです。いまになって北上山地のブナの保護をさかいでいますが、丹沢のブナだって北上山地に敗けない立派なものです。

私も丹沢のブナと比較するために、ブナがよいといわれる全国の山を歩いてみました。会の先輩にすすめられて、秋田の太平山に行ってみましたが、登山道から見たところでは非常に素直に育ったひょうろな感じがして、東北では外に朝日、月山、森吉山などに登りました。

丹沢には、何百年と経過した形のいいブナが古木が、風あたりの強い尾根筋にありま

の頭にかけては個性ゆたかな枝ぶりが見られます。私の浅見で言うなら、丹沢に匹敵するブナの古木は、兵庫の氷ノ山と、福井の荒島岳の一部で見たことがあるだけです、どうでしょう。

ただ、丹沢のブナは、古木に続く跡づきがありません。見るなら、いまのうちです。京浜地区の大気汚染の影響でブナの耐久力がなくなっているのが、強風が吹けば古い木は倒れてしまします。そして跡づきがないために、今後はブナの生きる植生環境が変わっていくだろうということです。

丹沢が小説に登場してくるのは、白井喬二の『富士に立つ影』。作中に東丹沢の前衛の煤ヶ谷方面の山が出てきます。もう一つは山窩小説の三角寛。

昭和十年ごろ、丹沢で登山者が殺されるといふ事件がありました。各社の新聞記事の中で、朝日だけが「登山者は丹沢の山窩に殺された」と書いた。なぜかという、当時、三角寛が朝日の社会部記者だったからです。丹沢は、三角寛が山窩小説で立っつけかけになったともいえます。私たちも、「丹沢には熊もいるが山窩もいるのか」と用心したのですが、どちらも出逢ったことはありませんでした。

(談話筆記 蜂谷 緑)

自然保護全国集会

自然保護委員会

今年で第十一回を迎えた自然保護全国集会は十月十九日、二十日の両日、秋色漂う三重県鈴鹿、湯

の山温泉で開催された。東海岳人の心のふるさとでもある鈴鹿山塊の名主御在所岳の麓、遙かに伊勢

済を望む県福祉休養ホーム、ゆずりは荘を会場として午後四時から妻倉委員の司会により開会。最初に国見委員長が過去の全国集會を振り返りながらその意義を強調され、続いて山田副会長からは自然保護など気にする必要もない時代、大変ハッピーな山ヤとして過ぎてきたがこれを機会に関心をもち

山の気象と気象学講座(9)

七月十一日(午後六時半より)

講師 大井正一氏
ルームにて

雲の見方 乳房雲はCbの下面等に垂れ下がり、付近の強い上昇気流の反流として生ずる。天気が回復する傾向にある。波状雲は山の風下に生ずる重力波で、山のすぐ風下では流れと直角の方向に列ぶ傾向があり、遠くなると、流れの方向に列ぶ傾向がある。塔状雲は山の中の湖、河等の上空に多く、水蒸気の補給が少い場合に生ずる。雨足はCc、Ac、Sc等に生ずるが、一般に南成分が多く湿度不安定の場合に多く、悪天候が長く続く前ぶれと見られることが多い。雲の穴の成因は未だ定説がない。

温度風風の概念は一般の人には解りにくい。例えば三〇〇mbと二〇〇mbの風をそれぞれベクトルで表わすと、上層のベクトルから下層のベクトルを引いたものもベクトルで、このベクトルのことを温度風という。測高公式の原理により、温度風は二層の間の等温線(厳密には等厚線)に平行に低温側を左手に見て吹く。つまり、等温線と温度風の関係は、等圧線と地衡風の関係と同じになる。温度風の原理により説明される最も著しい現象はジェット気流である。ヒマラヤの北側のチベ

つていきたいとの挨拶があった。続いて尾上東海支部長が地元を代表して歓迎の辞と共にもう日本の自然はギリギリのところになっていて、もつと抜本的なことを考えなければこのままですととんでもない結果になってしまうのではないかと、何とか山岳会の手で自然を守っていききたい、と熱意をこめ

て述べられた。次いで支部報告に移り秋田の福田委員より林道開発、森吉山スキー場問題等になると地元の利害がからんで必ずしも支部全員が反対するまでにはいかない難しさがあること、先日秋田で開催されたブナシンポジウムのは後はブナに関心を持つ人が多くなり活動がしやすくなったこと。

ットには周極東風による寒気が溜ってコールドプールとなり、南側のインダス河沿いにはモンスーンが東から西に向かって、ウォームプールを作る。このために強い南北の温度傾度が生じ、上層二〇〇mbに中心を持つ強風帯即ちジェット気流がヒマラヤの両側に生ずる。この二つのジェット気流はオホーツク海で合流し、一〇〇m以上の強風となる。この気流は寒気と暖気の境界、即ち極前線帯に沿って、北半球を取り巻いてはいるが、日本の上空ほど強い所は他にはない。冬は八丈島付近、夏は沿海州を通り、これが日本の真上に来る時が梅雨と霖雨に当たっている。アメリカ大陸ではロッキー等の大山脈が南北に当たっているため、ジェット気流の加速には全く寄与していない。もつと小規模に寒暖気流が合流しても、その上では温度風が強くなり、これを下層ジェットと呼ぶ。集中豪雨が起るのもこのためである。一般に登山している時に風が極端に強くなることがあるが、これも下層ジェットで、間もなく寒気側に入ると、風が収まれば好天を迎えることはわれわれが山で常に経験していることである。

出席者 赤羽昭夫、重村清、斎藤かつら、松丸秀夫、中村純二、及川由美子、木谷茂、三栖寿生、榎原保志

(高橋 詢)

科学研究委員会

石坂委員(富山)からは関電が北ア剣沢近藤岩付近から剣沢の水を黒四ダムへ向けて流すための取水路を計画しており、これが実現すると黒部が全く死んでしまうことも考えられ今これを阻止するのに苦労している旨報告があった。また、尾瀬長蔵小屋の平野会員からはピジターセンターが地元へ事前の説明なしに博物館として増改築する青写真が出来上ってしまったこと、長蔵小屋の前に辺りの風致を損ねるような馬鹿でかい便所を建設し、あまつさえその工事で湿原に立ち入り樹木を切り倒すというようなことを環境庁が卒先してやっていると自体今一番の問題であると生々しい現地レポートがあった。夕食を挟んで更に支部報告が続く小川委員(東海)からは御在所岳山上公園より北谷へ流れる汚水処理対策、ネパールカトマンズにおける自然保護シンポの中間報告、六二年名古屋で開催予定である太平洋環境会議の計画について。最後に国見委員長が東京における活動内容として八十周年展示会への参加、祖母傾に関する要望書提出、マナーノートⅡの作成等を報告して終った。

この後、中村委員の解説による「祖母傾山でのブナ伐採の現状」、渡辺委員の手になる「美しいスイスの高山植物」を各々スライドで観賞した後は懇親会に移り、アルコールの酔も手伝って夜半過ぎま

で談論風発賑やかなグループの輪が幾つかみられた。翌日は自由討議にうつり入山制限、し尿処理問題、マナーノートⅡに関して、或いは支部より本部への注文等をめぐって活発な意見交換が行なわれ、今後地道な反対運動を忘れずに続けて行くのではないかとという関塚担当理事の閉会の辞をもって二日間わたる全国集會は無事終了した。昼食後、若手?の多くは山田副会長を先頭に御在所岳の南にそびえる鎌ヶ岳の山頂を踏み鈴鹿の秋を満喫した。

なお、今回は関西支部、東九州支部等での行事が重なったとはいへ参加支部が少なく、しかも出欠席の回収率でさえ30%そこそこというのは大変残念であった。先年のアンケート調査をみてJAC会員の間における自然保護への関心の深さは相当なものと思うのだが。

最後になりましたが会場や記念品の手配、山行のガイド等尾上支部長、小川委員始め東海支部の皆様には大変お世話になりました。心から御礼申しあげます。

参加者 山田二郎 石坂久忠 福田文二 平野紀子 尾上昇 中世古隆司 小川 務 中田晴紀子 小川 繁 野呂邦彦 安藤忠夫 三ツ石 清 国見利夫 渡辺正臣 松丸秀夫 中村純二 斎藤かつら 梨羽時春 木名瀬 亘 松本恒広

関塚貞亨 麦倉 啓 中村あ
や 横山 隆 黒沢秀雄
(松本恒広)

上高地山研便り

山研運営委員会

上高地山研は、十一月四日に閉所しました。

今年は四月二十七日に開所して十一月三日までの半年の間で宿泊に利用した人は

会員 二一九(二〇〇)名
非会員 二六四(二七六)名
子供 三九(六一)名
合計 五二二(五三七)名
でした。(一)内は昨年度

残念ながら昨年度実績を少し減らしてしまいました。が、六、七月は連日の雨にたたられ、それが響いたようです。

改築して十年以上もたちましたが、今夏は建物のペンキ

山日記編集委員会からお知らせ

『山日記』は今年度(一九八五年)版で第五〇輯を迎えました。編集委員会としては、これを長い歴史のひと区切りと考え、五一輯からは版型や体裁を大きく改めて、会員手帳としてもご使用いただけるものにしたと思っています。また日記部分も当年七月から翌年七月までにする方針です。したがって第五一輯(一九八六年度版)の刊行は、来年の六月ごろになりますので、ご了承ください。

山日記編集委員会

も新しく塗り替え、化粧し直しました。

来年は、もう少し会員の皆さんに快適に過ごして頂けるように、閉所の期間中は設備の充実などを検討することにしております。

また、山研は正式の名前を「日本山岳会上高地山岳研究所」と呼んでおりますが、これを機会に親しみ易い山研目指して、愛称を会員皆さんより広く募集することも検討中です。

山研は上高地にある「日本山岳会」の山荘なのです。今後ともに会員皆さんのご利用をお待ちしております。

皆さんのご意見などを、ぜひ委員会にお聞かせ下さい。来年も、また、上高地山研で会いましょう。

(坂本正智)

〈新刊〉 牧野 和春 山 嶺 へ

なぜ山に登るのか。記録への挑戦でも、探険でも、信仰のためでもない。強いていえば本書は魂の自己救済としての登はんの赤裸々な手記である。 四六判 定価1500円

牧野出版 102 東京都千代田区飯田橋4-6-1
電話 03(261)0768 振替 東京2-103079

会務報告

十月理事会

10月9日 午後6時30分

場所 本会ルーム

出席者 今西会長、山田、大塚副
会長、鳴原、橋本、大橋、松永、
浜口、梅野、高遠、鈴木、新井、
太田、平井、絹川、関塚各理事、
竹田監事、松田評議員
委任 大森理事、宮下、中村評議
員

審議事項 なし

報告事項

○80周年記念行事最終の富山地区

